

サイゴン川に花咲きて

松尾
遼

宮野弘樹 (24) 会社員。連休を利用してベトナムに来る
深田正之 (24) 弘樹の高校の同級生、日本企業のベトナム支社に勤務している
細川真純 (25) 弘樹と正之の高校の同級生

○ホーチミンシティ・ベトナム市場

遠くで鳴り響くクラクションの音、人々の雑踏。

橙色のワンピースを着た女性、後ろ姿。女性はマーケットの人混みに紛れていく

○タン・ソン・ニャット国際空港・タクシー乗り場（夕方）

宮野弘樹（24） タクシーのトランクに大きなスーツケースを乗せている。

深田正之（24） タクシーに乗り込み、運転手に行く先を告げる。

弘樹もタクシーに乗り込み、扉を閉める。走り出すタクシー。

○タクシー・車内（夕方）

弘樹、正之、それぞれ窓の外を見ている。弘樹、正之のほうを向き

弘樹「来ちゃったよ、ベトナム」

正之、前を向き

正之「いやー本気で来るとは思わなかったわ」

弘樹、再び窓の外に顔を向け

弘樹「冗談のつもりだった？ 俺、そういうの通じないから」

正之「知ってる。付き合い長いから」

フロントガラスから見えるホーチミンシティの町並み。徐々にバイクの数が増える。

再び、後部座席。

弘樹「こっちでの暮らし、どう？」

正之「まあ、不自由はないよ、物価も安いし」

弘樹「言葉は？」

正之「買い物程度なら苦労はしないかな。だいたい家と事務所の往復だけだし」

弘樹「仕事場で会話とか、やっぱ英語？」

正之「基本的には日本人チームだから、そんなには。現地人も雇ってるけど、わりと日本

語話せるし。日本企業なんでね」

○ホテル・入口（夕方）

ホテルのドアマンがタクシーのトランクからスーツケースを降ろす。

正之「じゃあ、7時半に迎えに来るから」

弘樹「ああ」

正之「なんか、食いたいもんとかある？」

弘樹「やっぱり、ベトナムっぽいもの……トム・ヤム・クンとか」

正之「それ、タイ料理ね」

弘樹「ナシゴレンか」

正之「インドネシア料理。ああ、やっぱベトナムっぽいもんだよなあ。そう言うとは

思ってたけど……っばいっていえばビールとかフォーなんだろうけど、夜にそれだけ
つても、ちよつと……なあ」

弘樹「たしかに、夜にはちよつと、だな」

正之「一応、考えてた店はあるんで。ベトナムのイメージとは違うかもしれないけど」

弘樹「ああ、任せるよ」

○フエ宮廷料理レストラン（夜）

弘樹と正之がテーブルをはさんで向き合っている。

テーブルの上には半分空いた333ビールの瓶、ビールが注がれたコップ2つ

正之「え、じゃああれは？ 井上とき、ほら、あれ？ 数学のあの先生、名前なんだっけ？
ど忘れした」

弘樹「篠崎だろ？」

正之「ああ、そうそう、ざきせんざきせん。一回軽く喧嘩したじゃん、あの二人 あれ、
理由なんだっけ？」

弘樹「ざきせんが井上のことをなぜか、いーのうえつ、って呼んでて、なんかたまたま

井上、機嫌悪い時で、授業中何回もいーのうえつ、って呼ばれてカチンときたんだろ」

正之「（大笑いして）ちよーくだらねえ。つてか、よくデイティールまで覚えてるな」
弘樹、ビールを飲んで

弘樹「あれは覚えてるだろ、俺ん中で高校生活1，2を争うくだらない事件だもん。

つてか、井上と言えばあれだろ、クラスで勝手に始まった告白大会、一年の終わりの」
正之「屋上から叫んだのに、井上の時だけちよーどへり飛んでて聞こえなかったんだよな」

弘樹「そう、校庭にいたけど聞こえなかった」

正之「あいつ、誰の名前叫んだんだろう」

弘樹「やっぱ、あの当時好きだった、がっちゃんじゃない？ 蒲生律子。がり勉メガネの。」

叫んでも聞こえなきや意味ないけど」

正之「まあ、俺も同じ状況だったけどな。ちょうど消防車通っちゃって」

弘樹、ビールを飲む

正之、ビールを弘樹のコップに注ぐ

正之「告白と言えば、弘樹は細川さんには未練ないの？ 告白大会から大学3年ぐらい

まで付き合ってただろ？」

弘樹「細川真純……」

弘樹、ビールの瓶を持ち正之のグラスに注ごうとするが、正之は拒否する

弘樹「いや、さすがに別れて何年もたってるし未練はもう」

正之「安堵の様子で一息に息を吐きだして」そっか、そうだよな」

大皿料理が運ばれてくる。鳳凰をかたどったニンジンで料理が装飾されている。

弘樹「おお、これはすごいな」

正之「ベトナム中部に、フエという街があって、その宮廷料理なんだよね」

弘樹、隣の席に目を移す。隣の席には龍をかたどった装飾料理。

龍の胴体、鱗の部分は花菱形に切ったニンジンできている。

弘樹、そのニンジンを凝視する。

正之「この豪華な装飾を目で楽しむのもまた特色でさ」

弘樹「……」

正之「ん？」

正之、隣のテーブルを一瞥し

正之「どうかした？」

弘樹、視線を鳳凰に戻し

弘樹「え？ あ、いや、会話に夢中で見えてなかったけど、鳳凰とか龍とか装飾がすごいなって」

弘樹、左手で頬杖をつき再び、隣の龍に目を移す。

○道（夜）

弘樹、正之並んで歩いている

正之「悪いな、うち社宅だから、泊めてやれなくて」

弘樹「いやいや、こうしてガイドしてくれるだけ大助かりだよ」

正之「明日も昼前から案内するから。その前に、せっかく鶴巻高校バド部トップが揃いぶみしたんだ。ちよっとやらないか？ ラケットもシャトルも持っていくから」

弘樹「おお、いいな」

二人の背後からスクーターが近づいてくる。50代の女が運転し、後ろには20歳前後の女性が乗っている

正之「それに明日おまえに…」

スクーターを運転する女「アナタ、ニホンジン？ アソンデク？ フタリナラサービス

モウヒトリ、ワカイコ、クル」

正之「ホンダガールって言うんだ。会社の先輩が一回パンツ一丁でホテルから家まで帰ったって。無視が一番」

スクーターを運転する女「ミルダケ、ミテ。ワカイ、カワイイ、オッパイ」

弘樹「影みたいにどこまでもついてくる勢いだけ」

正之「道路渡っちゃえば、大丈夫」

スクーターを運転する女「コノコ、キモチイイ、ニンキアル。ポピーチャン」

弘樹、思わずスクーターの後ろに座る女性を見る。

正之「おい、誘惑に負けるなよ」

弘樹「そういうわけじゃ」

スクーターを運転する女「ホオラ、オニイサン、スキ。チョット、オッパイサワル？」

正之「責任は持たないけど、触ってみれば？」

弘樹「いや、そういうんじゃないんだ、行こう」

数多のバイクが川のように流れる大通りを、合間を縫って二人は進んでいく

○ホテル・部屋（夜）

ガウン姿の弘樹、窓の外を見つめる。

窓の向こうには広がるサイゴン川が街のネオンを反射している。

弘樹「なんか…：…なんかな」

弘樹、スマホを握りベッドに倒れこむ。スマホブラウザで細川真純を検索する。

検索結果には大学ラクロス部の部員紹介ページのみ。

枕元にスマホを放り投げ、天井を見つめる。

○(回想) 高校・教室(夕方)

弘樹(16)、窓際の机で本を読んでいる。窓から西日が差しこんでいる。

ブレザーの制服をきた真純(16)が弘樹にばれないよう、後ろから近づき

真純「ひろくん、まだ読み終わってないの？」

弘樹「おお、びっくりした」

真純「読み終わったら貸してって言ってるのに」

弘樹「貸してっていつても、これは自分の本じゃないんだ」

真純「知ってるよ、その区立図書館で借りたんでしょ？」

弘樹「図書館の本、又貸し禁止だから」

真純「でも、まだ返却日まで時間があるでしょ？」

弘樹「……わからん人だな。僕が返した後に自分で借りればいいじゃん」

真純「図書館のカード、持ってないんだもん」

弘樹「生徒手帳を見せれば、すぐにつくれるよ」

真純「でも、でも、すぐに読みたいの」

弘樹「8割方読んだけど、この本そこまで面白くないよ。そんなに読みたい？」

真純「だって、その本のタイトル……」

○靴屋・外(朝)

道路沿いに靴が並べられている。外の椅子に店員が座っている。

弘樹「えっと、80万ドンっていくらだ……？ 1000ドンが4円として、3000円

ちよつとか。まあ、いいか」

弘樹、サンダルを持つ。店員、無表情、弘樹の顔を見つめ頷く。店員にお金を渡す。

弘樹、腕時計を見る。横を女性が通り過ぎる。その鼻歌に気が付き、弘樹、前方に

女性に視線を映す。長い黒髪の女性、後姿。一瞬あつけにとられ

弘樹「真純……？」

一歩踏み出そうとしたところ、店員に服をつかまれる。

弘樹「なに？」

店員、先ほど渡した10万ドン札を見せ、指を一本たてている。

弘樹「足りないって？」

財布から、10万ドン札を取り出し、店員に渡す。

すでに女性は人混みの中。弘樹、人混みをかき分け進む。

前方に、さきほどの後ろ姿を見つける。

弘樹「(大きな声で) 真純」

周囲の人々が弘樹のほうを向く。女性も顔だけ弘樹を一瞥。ベトナム人女性。

○サイゴン川ひとり・バドミントンコート

二人、バドミントンをしている。ラリーしながら。

弘樹「2年前に、クラス会あったじゃん。俺、参加できなかったやつ」

正之「うん」

弘樹「フェイスブックで見たけど、結構集まってたでしょ」

正之「そうだよ、弘樹こないのかって、みんな言ってたよ」

弘樹「そんな時さ……」

弘樹が返したシャツルがネットに引っかかる

弘樹「そんな時、井上元気だった？」

弘樹、シャツルを拾って正之に渡す。

正之「おまえ、なんだかんだいって、井上好きな。普通に元気だったよ。むしろ、あの頃と同じように、陽水の真似でお元気ですか？ ってこっちが聞かれたよ」

正之、サーブ。

弘樹「変わってねえな」

正之「ってか、いまさらあのクラス会の話かよ。本当は、気になってるのは井上じゃなく細川さんなんだろ？」

弘樹、シャツルがいい位置に来るもラケットを振らず。シャツルがコートに落ちる。

正之「おいおい。かまかけたつもりが、凶星かよ……やっぱり、未練あるじゃん」

二人、タオルを手取る。

弘樹「未練じゃないんだけど、昨日から心に引っかかっていることあって」

正之「さつきから引っかかっているのは、お前のシャツルだよ。元副部長も腕が落ちたな」

弘樹「元部長にはかなわないよ。それに頭もモヤモヤしてて」

正之「そういうのを、未練って言うんだよ。勘弁してくれよ」

正之、顔をふく。

弘樹「そんなに呆れることないだろ？」

弘樹、体をふきながら。

正之「男の恋は、別名で保存ってやつ？ でも、女はとっくに上書き保存してるから」

弘樹「そうだと思うし、そう願ってるよ」

正之「モヤモヤは汗と一緒に流せ」

弘樹「ああ……ベトナムまで来てバドやるとは。ここバドミントンコート多いんだな」

正之「さすがにこの時間は人少ないけどな」

弘樹「暑いもんな。昼食べる前にシャワーだな、ホテルのシャワー使う？」

正之「いや、一回家帰るわ。そんな遠くないし」

○ホテル・部屋

弘樹、シャワーを浴びている。

真純（声）「私の誕生日の花なんだよね。それにね、私のおじいちゃんの家、長瀬なんだけ

ど近所に名所があつて、5月の終わりに行くと一面オレンジできれいなんだ」

弘樹「長瀬！ 長瀬なんか園だ」

弘樹、なにかを思い出したように、身体も拭かないままスマホを触る。

弘樹「深いため息 あー」

○ベントン市場

弘樹「本場のフォーウまかったよ」

正之「もう飽きちゃったからわからないけど、そういつてくれるなら甲斐があつた」

弘樹、サンダルが片方脱げる

正之「どしたん？」

弘樹「サンダル脱げた。さっき買ったばかりだから、慣れてなくて」

サンダルを履きなおし

正之「こつちで買ったやつ？ いくらだった？」

弘樹「80万、いやあとで数えたら90万ドンだった」

正之「うわ、高っ」

弘樹、サンダルを履きなおし顔をあげる。少し離れた場所を歩く女性に気が付く。

弘樹「真純……」

正之「え？」

弘樹「真純が、そこに」

女性、角を曲がる。弘樹、歩き始める。正之、動かない。

正之「……見間違えだろ」

弘樹「いや、今度は本物だ、顔を見た」

正之「今度は？」

弘樹「とにかく、追わないと」

弘樹、人混みをかき分け走る。後を追う正之。

正之「待てよ、いるわけないだろ、ベトナムに」

二人、曲がり角に立つ

弘樹「真純……」

正之「おまえ、おかしいぞ。未練を通り越してノイローゼだ」

弘樹「顔を見たんだって、確実に」

正之「いないよ、いない。同じ東京に住んですれ違ったことあるか？」

弘樹、各店舗にいる客を見ながら女性が曲がっていったほうへと足早へ進む。

正之「昨日、俺が彼女のこと思い出させたのが悪かったか？ 火つけちゃったか」

○ベントアン市場・外

ロータリー内の公園を歩いている真純。弘樹、それをみつけ車道を渡ろうとするが車とバイクに邪魔される。

正之「ホーチミンシティには日本人も大勢いる。見間違いなんで、あり得るだろ」

弘樹「それでも、話しかけてみないと」

真純は、ロータリーの真ん中を通って、反対側へ。外周から追いかける弘樹。

正之が腕をつかみ、弘樹を振り向かせる。

正之「いい加減にしろよ！」

弘樹「止めるなよ！」

正之「もし、もしも、本人だったとして、何を話すんだよ、いまさら。未練だろ、未練でまた、あの子傷つけるつもりかよ！」

周囲の視線が二人に集まる。真純、その様子に気がつく

弘樹「未練だよ！……でも、どうしようもないんだ」

正之「そんなの、エゴだろ！ それで、彼女、どう思うよ？」

弘樹「わかってるよ、わかってるけどさ。俺、思い出したんだよ」

正之、さえぎるように

正之「彼女は彼女で、別の人生を歩いている。いまさら突然目の前に現れるのは、彼女を混乱させるだけだ」

正之、つかんでいた腕を離す。弘樹の後ろに視線をやる。

真純「ひろ……くん？」

弘樹「真純……」

沈黙。徐々にロータリー俯瞰へ。

○ホテル・ラウンジ（夕方）

真純と弘樹が向かい合って座っている。正之は真純の隣。

アイスコーヒーのグラスが3つ

真純「驚いたよー正之くんに会いに来た友達って、宮野くんだったんだ」

正之「黙っていたことは謝る」

真純「……どうしてベトナムに？ って顔してるね」

弘樹「まあ……聞きたいことは色々あるけど」

真純「私、非社員だったんだけど、会社の業績悪化で解雇になったのね。2週間前に。

結構、仕事も好きだったんだけどさ」

弘樹「2週間前っていうと、ちょうど」

真純「ちょうど、誕生日だった。誕生日、覚えててくれたんだね」

弘樹「長い付き合いだし」

真純「そうだね。何度もお祝いしてもらったもんね」

弘樹「……」

真純「誕生日に仕事クビになって、それで、どっか遠くに行っちゃいたいなあって」

正之「連絡もらってさ、俺が誘ったんだベトナムに」

真純「それで、先週からこっちに。正之くんとは、クラス会の後から結構連絡取り合っ

たんだよね」

正之「冗談半分のつもりだったんだ、本気で来るとは思わなかった。もちろん、こっち

は時間の流れもゆっくりだし、少し心を休ませるにはいいかな、っていうのは本当に

思ってたけど。」

弘樹、アイスコーヒーを飲む

弘樹「まさか、ベトナムで会うとは思わなかった」

正之「……色々悩んだよ。弘樹も、まさか来ると思ってたし、しかも、タイミングよく同じ時期に……誘った手前どっちも断れないし、とりあえず両方に伏せておこうと」
真純「なんでよ。遠い国で、クラスメートが3人そろうなんて、素敵なことじゃない」

正之、コーヒーを飲んで

正之「昨日の夜、弘樹がもう未練ないっていうから今日にでも会わせようと思ってたんだ。ただ、今日会ってみたら、未練タラタラだからさ……」

弘樹「ちよつと！」

真純「未練……」

弘樹「いや……」

真純「……」

弘樹「振っておいて、未練も何もないよな……ごめんな」

弘樹、うつむく

真純「それは。あのときは、私のほうも就活で焦ってたし、一方的に悪いわけじゃ……」

正之「お、なんだよ、いい感じ？ 俺の配慮は余計なおせっかいだっただってやつ？」

遠い異国で再会なんて、ドラマチックじゃないの。これをきっかけに元サヤか」

正之「告白の目撃者として、盛大に祝うよ」

真純「……最後に」

弘樹「うん？」

真純「最後にあげた、花の名前、憶えてる？」

しばし沈黙

真純「はい、時間切れ。そうか、そうだよ。花あげたのも、覚えてないでしょ？」

弘樹「……ごめん」

真純「あの花の名前、憶えてたら元サヤにおさまってもいいと思ったけど」

弘樹「……」

真純「なんてね。うそうそ。私は別に、自分を振った男になんか未練ありませんよー」

弘樹「うん」

真純「でも、せつかくこんな遠い国で運命的に出会えたから、今までのことは水に流そう
また、クラスメートとして、どこかで会おうよ」

弘樹「そうだね」

真純「早速、もうクラスメートトークしちゃうけど、がっちゃん、もう3人子供居るの、知ってた？」

弘樹「あの、がり勉メガネの？ まじかよ」

○バー・店内（夜）

弘樹と正之、隣あって座っている

弘樹、カクテルグラスに入ったウォッカ・マティーニを飲み干す。

弘樹「カリフォルニアポピー」

正之「そんな酒あったっけ？」

弘樹「いや、花の名前だ。真純が最後にくれた」

正之「なんだ。いまさら思い出したのかよ」

弘樹「今日会う前に思い出してた」

正之、むせる

正之「じゃあ、あの時、なんで」

弘樹「答えたところで、どうなってたかなんてわからないよ」

正之「そんなことない。クラス会の時だって、お前のこと待ち続けて」

弘樹「今だから言うけどさ、あの日用事なんてなかったんだ。逃げたんだ。

真純と顔合わせるの怖くて、なに話せばいいかわからなくて」

正之「そのわりに、今日はあんな夢中で走ってたじゃん」

弘樹「昨日の夜から、頭の片隅に何かが引っ掛かってたんだ。今日の昼にようやく思い

出した。カリフォルニアポピー。真純にとって特別な花。そしたら一気に色々な日々が、

頭の中で湧水のようにになって、顔を見た瞬間に溢れ出して、もう理性もきかなくて」

正之「だったら、なおさら！ あれか、会って見たら変わってたか？思い出のほうが綺麗だったか？」

弘樹「むしろ、逆だよ。あの頃以上に、今のほうが綺麗だった。声も仕草も、あの頃の

まま魅力的だった」

正之「わかんねえよ」

弘樹「あの花の花言葉はさ、私を拒絶しないで。そんな気持ちで、あの時花をくれたのに、俺は受け取らず、あいつを避けた。忘れていたんだ、何の花か。そして、あいつは、

俺の前から姿を消した。そんな仕打ちしたんだ。おまえの言う通り、会うべきじゃなかったんだよ。あの花のことを、今日まで忘れてた時点で、失格だ」

正之「失格も、クソもあるかよ。かっこつけてんじゃねえよ。過去は変えられないだろ」
弘樹「そうだよ。でも、未来は変えられる……告白大会でな、お前が誰の名前を叫んだか聞こえてたんだよ。ヘリには隠れても消防車には隠れられなかった」

正之「……俺も真純が好きだったから？ だから自分は降りたとでも？ 冗談じゃねえぞ」

弘樹「あの頃から、いつもお前はそうだ。部長の時も、自分のことは後回しで、いつも誰かのことばかり」

正之「そんなの、理由になるかよ」

弘樹「あいつが困っているときに、俺には何もできなかった。でも、お前は違う。今回だって、真純が悩んでいる時に、手を差し伸べることができた。かっこつけてるのはおまえだろ、素直になれよ」

正之「……」

弘樹「遠い異国まで、お前を頼ってきてくれたんじゃないか。あいつだって、おまえのこと、悪いようには思っていないさ」

正之「俺の近くにいれば、弘樹のことを感じられるから。俺の向こうに、お前をみてるだけなんじゃないかって……」

弘樹「そんなことない」

正之、涙をこらえながら

正之「正直言えばさ、二人には会ってほしくなかった。やっぱり、未練があるなってわかった時から。怖かった。そうはいつでも真純は、今でもどこかでお前のことを……」

弘樹「言うなよ」

弘樹、上を向き目頭を押さえる。

○高校・教室（夕方）

弘樹、本を読んでいる

真純「だって、その本のタイトル、カリフォルニアポピーって面白そうじゃない」

弘樹「でも、あまり内容に絡んでこないけどな。結局花が犯人の」

真純「ちよっと、言わないでよ」

弘樹「ごめん」

真純「カリフォルニアポピー、ハナビシソウの別名。花菱みたいな形してるんだよ。」

私の誕生日の花なんだよね。それにね、私のおじいちゃんの家、長瀬んだけど近所に名所があつて、5月の終わりに行くと一面オレンジできれいなんだ。長瀬ハナビシソウ園っていうの。いつか一緒に行きたいね。ねえ、ひろくん聞いている？」

弘樹「聞いてない、読んでる。早く貸せつてうるさい奴がいるから」

真純「ひどい」

弘樹「読んだらいいのか、聞いたらいいのか」

真純「カリフォルニアポピーはねおじいちゃんとの思い出が詰まった特別な花なんだ。」

将来結婚して家を建てたら、庭に植えるのが夢なの。いや、庭なくてもいいんだ。家の中に飾っておければ。もう！本当に私の話、聞いてないんだね。私を拒絶しないで」

弘樹、本から真純に視線を動かす

弘樹「え？」

真純「その花の花言葉」

弘樹「なんだ」

真純「他にも花言葉があるの、もう一つの意味はね」

○ホテル・部屋（夜）

弘樹、窓の外を見ている。窓ガラスに弘樹の顔が反射して写る。

真純（声）・弘樹「消えることのない想い」

弘樹、一筋の涙を流す

○道（夜）

橙色のワンピースを着た真純、上弦の月を見上げる。涙が今にも溢れそうである。

正面から、正之が気恥ずかしそうに歩いてくる

真純、それに気がつき涙をこまかし微笑む

○ホーチミンシティ・俯瞰（夜）

弘樹（声）「その花言葉は、この街に……この街に忘れていくよ」

サイゴン川を往く船が汽笛を鳴らす。